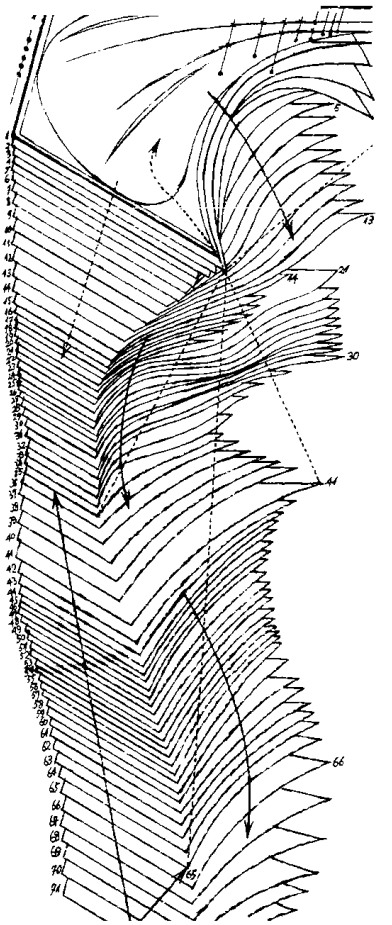
荒正人著作集

第五巻　小説家夏目漱石の

荒正人著作集

第五巻　小説家夏目漱石の全容



三一書房

荒正人著作集　第五巻

1984年10月31日　第1版第1刷発行

著　者　荒　正　人
© 荒静枝　1984年
発行者　菊地喜三次
印刷所　株式会社　厚徳社
製本所　東京美術紙工
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電　話 03 (291) 3131～5番
振　替　東　京9－84160番
郵便番号　101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　Printed in Japan

荒正人著作集　第五巻／小説家夏目漱石の全容／目次

吾輩は猫である……6
坊っちゃん／草枕……52
虞美人草／二百十日……106
野分／坑夫／門……158
三四郎／それから……221
彼岸過迄／こゝろ……284
行人……345
硝子戸の中／道草……408
明暗……469
小品・短篇・紀行……549
解説……山室静……639
年譜・執筆・著作目録（荒このみ　植松みどり）……655

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

荒正人著作集　第五巻／小説家夏目漱石の全容

本集に収録するに際して、各作品の漢字は新字体に改め（俗字・宛字は原文のまま）、仮名づかいは引用文以外、現代仮名づかいに統一し（送り仮名は原文のまま）、促音・拗音は小字で表記した。

小説家夏目漱石の全容

吾輩は猫である

夏目漱石の『吾輩は猫である』は、初めから長篇として発表されたものではない。初めは、一回だけの短篇として『ホトトギス』に掲載されたものである。それが現在のような長篇に成長し、定着する道筋について、漱石は、談話筆記「処女作追懐談」（『文章世界』明治四一・九）のなかで、こういっている。

「私が日本に帰つた時（正岡〔子規〕はもう死んで居た）編輯者の虚子から何か書いて呉れないかと嘱まれたので、始めて『吾輩は猫である』といふのを書いた。所が虚子がそれを読んで、これは不可ませんと云ふ。訳を聞いて見ると段々ある。今は丸で忘れて仕舞つたが、兎に角尤もだと思つて書き直した。

今度は虚子が大いに賞めてそれを『ホトヽギス』に載せたが、実はそれ一回きりのつもりだつたのだ。ところが虚子が面白いから続きを書けといふので、だん〳〵書いて居るうちにあんなに長くなつて了つた。といふやうな訳だから、私はたゞ偶然そんなものを書いたといふだけで、別に当時の文壇に対してどうかうといふ考も何もなかつた。たゞ書きたいから書き、作りたいから作つたまでで、つまり言へば、私があゝいふ時機に達して居たのである。もつとも書き初めた時と、終る時分とは余程

考が違つて居た。文体なども人を真似るのがいやだつたから、あんな風にやつて見たに過ぎない。」

一方、高浜虚子は『漱石氏と私』（阿蘭陀書房・第四版、大正七・六・二八）で、つぎのような思い出を語っている。

「此頃われ等仲間の文章熱は非常に盛んであつた。殆ど毎月のやうに集会して文章会を開いてゐた。それは子規居士生前からあつた会で、『文章には山がなくては駄目だ。』といふ子規居士の主張に基いて、われ等はその文章会を山会と呼んでゐた。その山会に出席するものは四方太、鼠骨、碧梧桐、私などが主なものであつた。従来芝居見物などに誘ひ出す度びに一向乗り気にならなかつた漱石氏が、連句や俳体詩には余程油が乗つてゐるらしかつたので、私は或時文章も作つてみてはどうかといふことを勧めてみた。遂に来る十二月の何日に根岸の子規旧廬で山会をやることになつてゐるのだから、それまでに何か書いてみてはどうか、その行きがけにあなたの宅へ立寄るからといふことを約束した。当日、出来て居るかどうかをあやぶみながら私は出掛けて見た。漱石氏は愉快さうな顔をして私を迎へて、一つ出来たからすぐこゝで読んで見て呉れとのことであつた。見ると数十枚の原稿用紙に書かれた相当に長い物であつたので私は先づ其分量に驚かされた。それから氏の要求するまゝに私はそれを朗読した。氏はそれを傍らで聞き乍ら自分の作物に深い興味を見出すものゝ如くしば〳〵噴き出して笑つたりなどした。私は今迄山会で見た多くの文章とは全く趣きを異にしたものであつたので少し見当がつき兼ねたけれども、兎に角面白かつたので大に推賞した。気のついた欠点は言つて呉れろとのことであつたので、私はところ〳〵贅文句と思はるゝものを指摘した。氏は大分不平らしかつたけれども、未だ文章に就いて確かな自信がなく寧ろ私を以つて作文の上には一日の長あるものとして居

つたので大概私の指摘したところは抹殺したり、書き改めたりした。中には原稿紙二枚ほどの分量を除いたところもあつた。それは後といはず直ぐ其場で直ほしたので大分時間がとれた。私がその原稿を携へて山会に出たのは大分定刻を過ぎてゐた。

この『我輩(ママ)は猫である』――漱石氏は私が行つた時には原稿紙の書き出しを三四行明けたまゝにして置いて、まだ名はつけてゐなかつた。名前は『猫伝』としようか、それとも書き出しの第一句である『吾輩は猫である』を其儘用ひようかと思つて決しかねてゐるとの事であつた。私は『吾輩は猫である』の方に賛成した。――は文章会員一同に、『兎に角変つてゐる。』といふ点に於て讃辞を呈せしめた。さうして明治三十八年一月発行のホトトギスの巻頭に載せた。此一篇が忽ち漱石氏の名を文壇に嘖々たらしめた事は世人の記憶に新たなる所である。」(原文は総ふり仮名)

以上二つの文章は、『吾輩は猫である』の生まれるまでの事情をよく伝えている。ただし、前者は、漱石自身の言葉であり、『吾輩は猫である』を完結してから数年しか経ていないものであり、後者は、『吾輩は猫である』の助産婦の役目を果した虚子が、ひと昔以上もすぎてから、古い記憶をたどったものであることは留意する必要があろう。前者と後者の間には微妙な喰い違いがある。

漱石は、初め「短篇・吾輩は猫である」(これは、題名もまだなかった)を書いたのである。書きたくてかいてみたという感じの強い作品であった。それは、原稿の段階で、字句や文章の訂正が行なわれた。そのとき、原稿紙二枚分ほどを削ったところもあった。それがどんな箇所であるかは、原稿の失われてしまった現在では、間接に推定するよりほかない。小宮豊隆は、『夏目漱石』(岩波書店、昭和一三・七)のなかで、明治三十七、八年ごろの断片三つから推定を試み、書生の合宿所での会話の調

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

子、「新体詩」、水彩画の稽古などは、削除された部分に濃厚に取り入れられているのではないか、という妥当な推定を試みている。これは、傾聴すべき指摘であろう。

私は、文章の形態と段落（パラグラフ）からみて、幾らか長めの章節の間に、突然極めて短いものが挟まれている箇所は、削除、修正、挿入された部分ではないかと推定したい。『吾輩は猫である』の他の章、つまり、第一回のほかには、こういう箇所はほとんど見あたらない。会話に続く、説明ふうの地の文章はむろん除く。――原稿がないからといって、改変の箇所が全くわからぬとあきらめる必要はない。この程度のことなら、単純な計算でもできるけれども、電子計算機（コンピューター）を利用し、文章のつなぎを統計的に調べれば、もっと精密な推定ができることを付記しておきたい。

『吾輩は猫である』を読むにあたって、ぜひ知っておきたいことがある。それは、漱石の住んでいた家の模様である。夏目鏡子述 松岡譲筆録『漱石の思ひ出』（昭和三・一一・二三、改造社刊）（岩波書店、昭和四・一〇・一五、角川文庫、背表紙には、夏目鏡子、奥付には、製作者として、夏目鏡子、松岡譲、昭和四一・三・二〇）に、要領のよい説明が試みられている。

「先づ千駄木の道に面して門があつて、門を入つてじきに玄関、玄関の間が二畳か三畳敷。玄関は東に面して居ります。玄関の間を出ると南をうけた縁側があつて、取突きが長細い六畳位の広さの部屋。そこは物置き同然に本をつめて置きました。お隣が八畳の座敷。こゝで夏目が朝よく猫を背中にのせたまゝ寝そべつて新聞をよんでゐました。次が六畳で私の居間。こゝに私たちは寝みます。この三つの部屋が南向きで、その背中合せに、私の居間の後ろが六畳で子供部屋。座敷の後ろが茶の間で八畳、その隣が三畳の女中部屋で、それに隣合つて台所と湯殿があります。夏目の書斎は玄関脇の六畳で、

間は襖になつてゐるのですけれども、そこへ大きな本棚をおいて、わざ〳〵一たん廊下に出て、そこから三尺の戸を開いて入るやうになつて居ります。その書斎の東側の窓が、夏目があたまの悪い時、毎朝、毎朝、道を隔てゝ向ひ側にある下宿屋の書生に、オイ、探偵君と呼びかけた記念の窓です。南に小い窓があり、あとは開いて縁側になつてゐます。大きな机を南に向けて据ゑて居りました。円窓の前の空地には古井戸が捨てゝあります。」

漱石は、この家に明治三十六年三月三日から、明治三十九年十二月二十七日まで住んでいた。これは、漱石の旧知斎藤阿具の持ち家で、第二高等学校に赴任している間、借りていたのであった。十年ほどまえには、森鷗外もやはりここに住んでいた。——漱石がイギリス留学から帰国したのは、明治三十六年(一九〇三)一月二十三日(神戸着)で、そのときは、熊本には帰らないで、妻子の住んでいた中根家の隠居所(牛込区矢来町三番地中ノ丸)に落ちついた。千駄木町へは、そこから引っ越したのである。第五高等学校は、三月三十一日付で、依願免官になり、四月から第一高等学校講師に就任し、東京帝国大学の講師を兼任した。前者は、年俸七百円、後者は、年俸八百円であった。帰国してからの生活は楽でなく、夏ごろ神経衰弱になり、大学をやめて、文学に専念しようかと思い悩み、一時妻子と別居していた。妻子は、実家に戻っていたのである。秋になると、神経衰弱は一時落ちついたけれども、十一月に再発し、こんどは翌年の春までつづいたらしい。家計は苦しく、この年の四月には、明治大学の講師も兼ねることになった。月給は三十円であったが、それでも助けになった。神経衰弱は落ちついていたというものの、完全には治らず、一進一退の状態を繰り返していた。

この時期の漱石の意識の深部を知る手掛りとなるものが幾つかある。そのなかで、いくらか重要と

思われるものとして、英詩と英文をあげておきたい。――漱石の英詩は、全部で十一篇ある。その大部分は、明治三十六年夏から冬に作られたものである。それを製作の年代順にならべてみよう。

(1) Life's Dialogue（明治三四・八・一）
(2) Silence（明治三六・八）
(3) Dawn of Creation（明治三六・八・一五）
(4) 散文詩風の断片（日付はない）
(5) Lonely I sit in my lonesome chamber（日付はない）
(6) I looked at her as she looked at me（明治三六・一一・二七）
(7) They had words together:（明治三六・一一・二七）
(8) I called to the stars in my dream.（明治三六・一一・二七）
(9) I rested my head against her heaving bosom;（明治三六・一一・二九）
(10) Let her dance alone in white,（明治三六・一二・八）
(11) We live in different worlds, you and I.（明治三七・四）

以上のうちで、(1)は、ロンドンで勉強していた際に作ったものである。「Craig ニ至ル　氏我詩ヲ評シテ Blake　ニ似タリト云ヘリ然シ incoherent　ナリト云ヘリ」と書いている。これはおそらく、(1)を指しているものかと思う。ブレークに似ているといえば、そうもいえよう。なお、この詩かどう

か断定できぬが、漱石の英詩を初めて全集に収録する際、クレイグに問い合わせ、返事をえたが、判読しにくかったので、市河三喜に依頼した。その結果、訂正の箇所は読み取れた。だがその訂正が果して妥当なものであるかどうかは断定できなかった。結局、クレイグの訂正を採用することにした。だが、漱石が初めに書いたもののほうがよかったかも知れぬという疑念が残った。（以上、林原耕三談）漱石の英詩は、(1)のほか、(11)は別だが、そのほかはすべて明治三十六年夏から冬にかけてのものである。(2)以下では、孤独な自己と夢幻の女性を繰り返しうたっている。その動機も主題もよく似ている。

I looked at her as she looked at me:
We looked and stood a moment,
Between Life and Dream.

We never met since:
Yet oft I stand
In the primrose path
Where Life meets Dream.

Oh that Life could
Melt into Dream,
Instead of Dream

Is constantly
Chased away by Life！

November 27, 1903

私があの女を眺めると、向うでもこちらを眺めた。
お互いにしばし立ち停まって見交わした、
現世（うつしよ）と夢幻（まぼろし）の間で。

私たちはあれから絶えて逢わない。
それなのに屢々私は立ち留まる、
悦びの小径に、
現世と夢幻の出会う所に。

願わくば、この現世が
夢幻のなかに溶け入らんことを、
夢幻の代わりに
絶えまなく
現世に狩り出されんことを！

一九〇三年十一月二十七日

これは、漱石の意識下の一面を伝えるものとして貴重な材料になろう。つぎの、最後の英詩もかかげておきたい。漱石の英詩の系列はここで終わってしまう。（訳文は、口語訳）

We live in different worlds, you and I.
Try what means you will,
We cannot meet, you and I.
You live in your world and are happy;
I in mine and am contented.
Then let us understand better
Not to interfere with each other's lot.
We break an ox's horn by bending it;
We are not meant to be broken like that!

Your world is far away from me.
It is veiled with miles of mist and haze.
It is in vain that I should strain my eyes
To catch glimpses of your abode.

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com